

岡真理201407291455パレスチナフォーラム

京都の岡真理です。

ガザの青年ブロガー、オマル・グライエブが書いた二つの文章をご紹介します。いずれも、エレクトロニック・インティファダにアップされたものです。

このメールで、「どうしたらガザの浜辺を今一度、かつてと同じように眺めることなどできるだろう」をご紹介します、次のメールで、「ガザで子どもを作らないとぼくが心に誓った理由」をご紹介します。

オマル・グライエブはガザのジャーナリスト、ブロガー。

"In the Eyes of the Beholder"という個人ブログに文章を發表しています。

<http://gazatimes.blogspot.jp/>

7月8日の攻撃開始以来、爆撃と停電の中、状況が許す限り、ブログを更新し、8本の文章をブログにアップしています。

パレスチナ人を「テロリスト」として悪魔化する言説は論外ですが、しかし、メディアのニュース映像で私たちが目にする、瓦礫と化した街や、血を流し傷ついた人々の姿もまた、私たちの日常世界からはあまりに隔たった光景であるため、遠い中東で起きている出来事として、逆にこれらの人々を私たちから遠ざけてしまう効果もあるのではないのでしょうか。ガザの人々を、「死傷者」というイメージの檻から解放し、私たちと同じ、生きている人間として想像すること、「人間化」する想像力が必要とされていると思います。

マスメディアの、ジャーナリスティックな報道とは違う形で、私たちがガザに、ガザの人々に、出会う必要があると思います。オマル・グライエブの文章をご紹介しますのはそのためです。ぜひ、お読みください。

以下で日本語訳をダウンロードできます（英語原文はこちらにあります）。

オマル自身が撮影した、ガザの、美しい浜辺の写真もあります。）

<http://1drv.ms/1uC6l6o>

■■ —————

どうしたら、ガザの浜辺を今一度、かつてと同じように眺めることなどできるだろう？

オマル・グライエブ

エレクトロニック・インティファダ

ガザ地区 2014年7月20日

<http://electronicintifada.net/search/site/Omar%20Ghraieb>

ぼくはよく、寢室の窓から、一日に何度も空を眺めては、自分の夢と、頭上の空の広がりの中で、我を忘れたものだ。自分の人生についても考えたものだ、今から何年後、自分はどこにいるのだろう、何を実現しようと頑張っているのだろう、とか、その他、実にたくさん大切な、でもささやかな思いの数々。

なによりも重要なことは、世界のいろいろな国や街を旅行するのをよく想像していたということだ。寝室の窓は、世界に通じる窓だった。その窓を通して、ぼくは自分が乗り出す次の冒険を想像した。今、寝室の窓から目にする光景に身が震える。

十日間以上も、ぼくは自宅に監禁状態だった。封鎖されたガザという世界最大の野外監獄の中の小さな監獄。一定間隔で、近くで爆発が起こるので、家族から窓に近寄るなど言われた。窓に鉄格子があるように思えてきた。

新鮮な空気が欲しくて窓に近寄ったとき、それまでとはまったく違う問いを抱いている自分がいた。友人たちにいつまた、会えるのだろうか？ ガザの浜辺をいつ見られるのだろうか？ ガザの、ぼくのお気に入りの場所をいつ訪ねることができるのだろうか？ 生き延びて、この窓を通して、また夢見ることができるだろうか？

生き延びる保証

戦争下では、何事も保証されてはいない。ぼくが生き延びられると誰に保証できる？ 浜辺で遊んでいた4人の幼い子どもたちがイスラエルに殺されるのだから。イスラエルの戦艦が、子どもたちのすぐ近くにあった掘っ立て小屋を爆撃し、子どもたちは最初の一撃のあと、その場を逃げ出した。だが、すぐに、もう一撃が、今度はまっすぐ狙いを定めて子どもたちに撃ち込まれた。あの子たちなりに、希望だって、夢だって、あったらうに。

「Is this the end? これで終わり?」ぼくは自問する。同じ窓辺に立っているのに、いつの間に、不可能を夢見ることから、もう一日生きることができるかどうかを考えるようになってしまったのだろう。ああ、そうだ、戦争のせいだ。アデルの「スカイフォール」を聞いたことをぼくは後悔した。今、この歌を引用したり、頭の中でだろうと再生したりするものではない。空がガザに落ちて欲しくなんかない。

期待

国連は7月17日、木曜、5時間あまりの束の間の「人道的」停戦を提案した。ハマースもイスラエルも同意して、停戦は午前10時に始まった。だが、停戦が始まる数秒前に〔原文は before the ceasefire ended となっているが、文脈と、報道されている事実から the ceasefire started の書き間違いと判断した一記者〕、イスラエルは集団殺戮を犯し、大勢の人間を殺して、人道的停戦という概念すべてをご破算にした。停戦開始の午前10時になっても無人機と戦闘機は依然、ぼくらの上空にいた。

停戦が効力を発揮しても最初は、何も変わらなかった。家から出た者はほとんどいない。沈黙が重くガザに立ち込めていた。やがて慎重な期待感が広がり、1時間を少し過ぎた頃、人々は、一斉に家から出始めた。まるで誰かがコーディネートしたみたいに。もちろん、そんなことはないのだが。

車が走りはじめ、通りは慌ただしくなり、人は必要なものをストックするため走り回った。

ガザじゅうに電気が通ったような感じだった。皮肉なことだ。人間の体内で、血が血管を流れることで生が表象されるけれど、ガザでは、通りに血が流れることで死が表象されるのだ。

ぼくは、[停戦の前夜、] 一晩中、起きていた。短時間の停戦になるのだろうか？ 外に出るべきか？ どこに行ったらいい？ 誰に会ったらいい？ 何をしたらいい？ 何を買ったらいい？ 高まる純粋な期待に、終わりのない一連の問いが注ぎ込まれる。溢れるアドレナリン。

その時がきて、ぼくは扉に向かう。心にこれといったプランがあるわけではない。扉を開け、突然、打ちのめされる。いったい自分は何をしているんだ。ぼくは扉を閉めると、中へ戻った。

浜辺

ぼくは、死ぬほど外に出たい、息がしたい、空を、浜辺を見たい、誰でもいい友人に会いたい、通りを見たい。自分が囚人のように、そして同時に、実験用のネズミのように扱われていたのだとぼくは気づいた。

ぼくは閉じ込められ、コントロールされている。いつ外に出てもいいか、いつ家に帰って自分を閉じ込めて、爆撃されて、殺されるまで待たなければならないのか、命令される。まるで詐欺だ。ぼくらは、薬を、食糧を貯め込まなくてはならないのだから、人道的詐欺。ぼくはそう理解している。

でも、早朝、あのバクル家の小さな天使たちが浜辺でサッカーをしていたとき、イスラエルに砲撃されて死ぬまいと逃げたのに、殺されてしまった、あの浜辺を、ぼくはかつてと同じように眺めることができるだろうか。何年か前にガザの浜辺でガリア一家が集団で殺された事件を忘れるのに何年もかかったのに、それでは十分ではないというのか。今、忘れたはずの昔の虐殺を想起させる新たな虐殺が起きてしまった。今、いったいどうしたら、ガザの浜辺をかつてと同じように眺めることができるだろう。

浜辺は、ガザのもっとも美しい宝石の一つだ。ガザの浜辺は、命綱だ。人々の正気を保ち、封鎖や占領があっても、個人的苦難があっても、それを忘れて、楽しいひと時を過ごさせてくれる。その浜辺すら、ぼくらから取り上げられてしまった。浜辺は今や破壊され、汚染されている。でも、これは、戦争と占領のせいだ。イスラエルは、あなたの魂を、あなたの存在を破壊したいと欲している。あなたの存在を閉じ込め、あなたの生活やあなたが住んでいるところの好ましい側面をことごとく汚そうと欲しているのだ——まるで、封鎖するだけではまだ足りないともいうように。

監獄

ぼくは、停戦という「人道的」詐欺をボイコットし、自分の監獄にとどまることに決めた。

監獄の庭にほんの数時間、出たからと言って、我が家が、巨大な監獄の中の小さな監獄であるという事実を拭い去りはしない。

家にいるというのは難しくはあったが、でも、ぼくの心は、そうするのは正しいことだと感じていた。ぼくはあらゆる人道的停戦をボイコットする。戦争が終わり、子どもたちが殺されなくなるまで。

イスラエルは何日にもわたって毎日、地上侵攻するぞとぼくらを脅し続けた。あの夜まで。ぼくは、それ〔地上戦が始まったこと〕を報道される前に肌で感じとった。ぼくらは、陸から、空から、海から攻撃されている。ガザは、ぼくらがその中で生きているということだけ除けば、まさにハリウッド映画の一場面になってしまった。

空が赤く染まり、夜が昼にとって代わった。あらゆる種類の兵器が使われるのが聞こえた。地面が揺れ、家がディスコのように明るくなり、大きな爆発音はもはや背景音ではない。死傷者の数は地上侵攻が始まって以来、劇的に急上昇し、その攻撃の非道さを証明している。

戦争は続く。新たな命、夢、希望、存在が殺されている。新たな爆撃がいたるところで。新たな流血。新たな集団虐殺。新たにいくつもの家族が、一家全員の命を奪われた。日々、更新される監獄の収容契約。

ねえ、きみ、トンネルの先に灯りは見えるかい？

オマル・グライエブ ガザのジャーナリスト、ブロガー。

gazatimes.blogspot.com (ブログ) : @Omar_Gaza. (ツイッター)

[翻訳：岡 真理]

以上